千葉市立郷土博物館　おうちミュージアム

むかしの千葉市の海岸のようす

＜千葉市・千葉市教育委員会（令和２年３月）発行『千葉市の海辺』前書き（一部改）から＞

①　まだこのまちが「千葉」とよばれる前のはるか昔、人びとは、海でとれた貝や魚を食べてくらし、加曽利貝塚などの数かずの貝塚を残しました。

②　やがて、武士の一族「千葉氏」によって「千葉」のまちの歴史がはじまります。そして、東京湾に面した、海と陸の交通があつまる地としてさかえました。

③　千葉のまちが市となったころ、浅い海を生かした「のりつくり」や漁業がさかんになるとともに、「海水浴」や「しおひがり」も楽しめる海辺としてにぎわうようになりました。

④　今は、うめ立てによってすがたを変え、新しいまちと人々のくらしが生まれました。海辺には数かずの工場や団地が立ちならぶようになりましたが、一方で幕張メッセなどのすぐ先に広がる海浜では、とおい昔のようすを感じることができます。

千葉市立郷土博物館の５かいで、③④の時期を扱った「千葉市の海岸」というパネル展を行っています。

＜パネル展　はじめの解説文（一部あらためましたが、すこしむずかしい言葉が残っています）＞

むかしの千葉の海は遠浅（海の深さが浅い）で、干潮(かんちょう＝引きしお)時には広い砂干潟ができました。この干潟ではあさり・はまぐりなどの貝が良く育ち、貝の中身を取り出して、さかんにおみやげとして売っていました。また、帆（ほ）張ったを打瀬船(うたせぶね)による漁やのりつくりもさかんでした。千葉市の海では明治 38 年、寒川町のそばでのりつくりが始められ、昭和 10 年頃にはまわりの海岸に広がりました。さらに、東京から近いのですずしさを求めたり、海水浴・しおひがりなどを目的とした多くの観光客も来ました。

こうした海辺のけしきは、高度経済成長(こうどけいざいせいちょう)期の工事で大きく変わりました。きっかけとなったのは、昭和 28 年中央区の川崎製鉄(かわさきせいてつ)の工場ができたことです。その翌年には千葉港ができて、昭和 32 年になると東京電力の千葉火力発電所もできました。千葉市の工業は大きく進みました。

一方で公害問題も発生したことによって、昭和 30 年代後半からの海辺のうめ立て地には非公害型の食品工場や東京のベッドタウンとしての住宅団地、学校、商業施設等が次々とつくられました。かつて干潟が広がっていた場所に新しい町が生まれていったのです。

※　今回はパネル展に展示されている写真に収蔵写真も加えて、昔の千葉市の海岸を紹介します。

←　貝を取る人々　これは出州海岸です

奥にはうめ立て地に進出した川崎製鉄の工場がみえます。

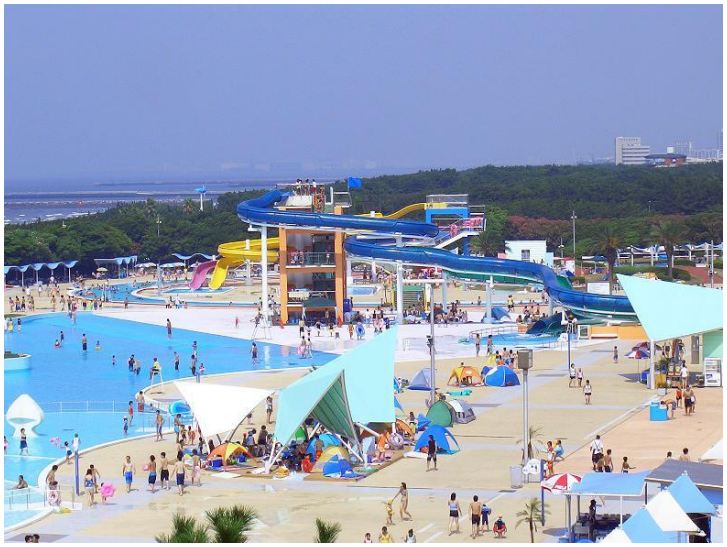
（昭和３４年）

ここでは、写真が多く残っている稲毛海岸の時代をさかのぼってみていきましょう。

解説には『千葉市の海辺』の文章を多く引用しています。

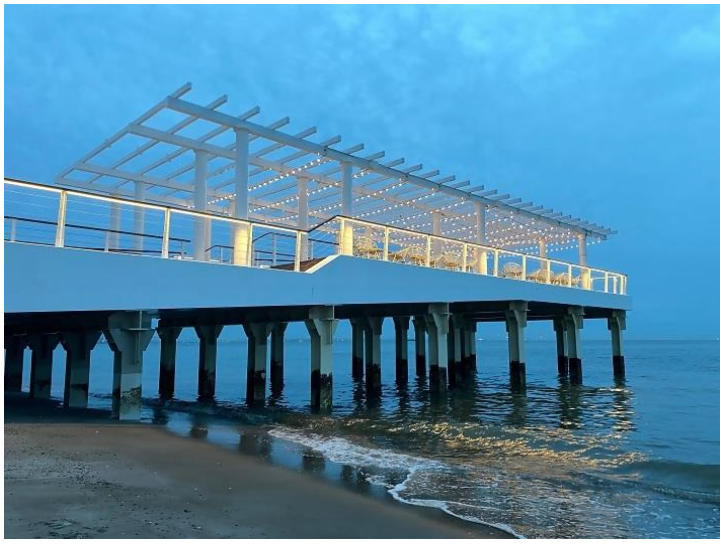
◎　令和５（2023）年７月に海浜公園プールが新しくなりました。また令和４（2022）年４月にできたウッドデッキは、先端にイス・テーブルを置いてくつろげるスペースをつくり、軽食やドリンクを持ち込めるなどで人気があります。

　令和元（2019）年に「ホワイトビーチ」として真っ白な砂浜に生まれかわった稲毛海岸。ここにはオートキャンプ場などもできて、稲毛海岸海浜公園「SNSET BEACH PARK INAGE」は、多くの人がおとずれる市民いこいの場となっています。



←　広くなったプール

ウッドデッキ
夕方になるとライトアップします。　→



←　あたらしくできる前の稲毛の浜と海浜公園です。
陸地の部分を見ると、うめ立て地の様子がよくわかります。
（平成４年）

◎　1960 年代（昭和 35～45）に新しくうめ立てが進められるまで、海岸線は現在の国道 14・３５７号線の近くにありました。遠浅の海の美しい風景がずっと続いていたそうです。千葉県の産業を工業化して県民のくらしをゆたかにするために、東京湾の浦安から富津岬までに広がる遠浅の海岸をうめ立てて、京葉工業地域(けいようこうぎょうちいき)ができたのです。1960 年代以降は、東京とそのまわりの人口が大きく増えてきたために、たくさんの工場といっしょに大きな住宅団地が次々にもつくられてました。

埋め立ての進められた年代です。
このあたりが稲毛海岸です。

← 写真下は海をうめ残して排水路にした黒砂(くろすな)水路で、交わるＳ字カーブは線路がひかれる前のＪＲ京葉線(けいようせん)です。
稲毛ニュータウンのようすが見えはじめています。
（昭和５１年）

児島公園

黒砂水路

右側をたてに国道14.号線が通っています。
上の方にとまっているのは「こじま丸」です。
上の写真右半分の真中あたり、船の向きはそのままにして「児島公園」があります。「こじま丸」の左側の海が広がる先をＪＲ京葉線が走っているわけです。
（昭和４１年）

→

←うめ立てのはじめの頃です。

海岸の近くに見える森は浅間神社(せんげんじんじゃ)です。

写真の右の方の海はまだ囲まれていません。
沖の方に見える四角い模様はなんでしょうか？？
（昭和 36 年）

◎昭和30（１９５５）年ころまでさかのぼると、だいぶ様子が変わってきます。遠浅で、干潟(ひがた)が広がる稲毛海岸では、春になると「あさり・はまぐり」などの貝が多く取れました。取れた貝は漁業をする人たちに売ったり、民家を訪ねて売り歩く行商(ぎょうしょう)をしました。また、海岸に近い「海の家」では貝の中身を取り出してむき身にして売る店もありました。また、しおひがりや海水浴もさかんでした。　＊干潟（ひがた）・・しおが引いて、海の表面が砂や泥(どろ)でおおわれるところです＊

← 国道そばの売店です。看板に「蛤(はまぐり)、あさり、干貝(ほしがい)とあります。海岸でとれたものを売っていました。　(昭和39年)

道に干しているもの、何かわかりますか？　→

そう、海苔(のり)です。

千葉市では、漁師さんの長年のくふうによって、のりの種（のりのもととなるもの）の作り方が考え出されました。夏から冬にかけて海の中でのりを育てて、真冬に取り入れます。取り入れ後はこまかくきざんで、写真のようにのりを干(ほ)して、そろえて、四角い形にして売りました。のりつくりはこのころの大切な産業でした。

(昭和32年)

＊稲毛海岸の沖に見えた四角い模様は
「のりの養殖(ようしょく)いかだ」でした！

← 稲毛海岸をはじめ千葉市の海岸は、しおが引いた後の干潟であさりなどの貝をほる「しおひがり」が人気のあそびで多くの人が東京方面からもおとずれる観光地でした。

(昭和30年)

そして、遠浅の海は海水浴にもてきしていました。　→

東京から電車で約一時間と交通の便も良かったので日帰りのお出かけの場所としてにぎわいました。

当時は、まだ海はうめ立てられていません。

(昭和30年)

◎　昭和初期（昭和元年は 1926 年）の頃までは、海水浴というのは温泉と同じように病気を治す方法として考えられていました。稲毛海水浴場がオープンした年、海岸には「稲毛海気療養所(かいきりょうようじょ)」が作られて、医師がいつもいました。後に所有者が変わって別荘(べっそう)風の旅館「海気館(かいきかん)」として生まれ変わり、海水浴やしおひがりの人々の他に、多くの作家もおとずれて創作活動を行いました

＊島崎藤村(しまざきとうそん)、森鴎外(もりおうがい)、徳田秋声(とくだしゅうせい)、田山花袋(たやまかたい)　など

←　海岸と松林の美しい景色が広がっていました。
干潟に立つ鳥居は、現在の国道 14 号線のわきにある浅間神社の鳥居です。

(両方ともに、大正末～昭和初期の写真)

↓

田山花袋(たやまかたい)（小説家）の短編小説「弟」より

『別荘(べっそう)のような小さな家屋があちこちの松原の中に独立していて、なんだか好(い)い感じがする』

1908(明治41)年　作品

◎　稲毛海岸は日本の「民間航空発祥(みんかんこうくうはっしょう)の地」（初めて飛行機が飛んだ場所）でもあります。しおが引くとかたく引きしまった平らな砂干潟が、海の向こうの３キロメートル位まであらわれる稲毛海岸は、滑走路（飛行機の飛びたつ所）として、まさにちょうどよい場所だったのです。飛行機に興味を持ち、勉強して民間操縦士(そうじゅうし)となった伊藤音次郎(いとうおとじろう)は、1916（大正５）年に民間の飛行機として初めて稲毛から東京まで飛ぶことに成功して、人びとをおどろかせました。
滑走路があった場所は、現在は公園になっていて、「民間航空発祥の地」の記念碑が立っています。

稲毛海岸の飛行場で訓練をするパイロットら＝千葉市立郷土博物館提供

←　訓練(くんれん)に使われているのは日本で作られた飛行機の「鳳(おおとり)号」ですね。
乗れる人は２名、もっとも速い速度は時速 70 ㎞。
長さ7m、最も大きなはばは最大幅 11.4m、
重さ470 ㎏。

(大正４年)

◎　干潟(ひがた)について説明しましょう。干潟には砂干潟と泥(どろ)干潟がありますが、千葉の干潟は砂干潟でした。遠浅の砂浜では長い年月をかけて砂や泥がゆっくりとつもり、「干潟」ができあがります。干潟はしおが引いた時にできて、しおがみちると海の中にかくれます。

　特に砂干潟は水の高さが低いため、日光や二酸化炭素(にさんかたんそ)が海中にとどきやすく、それらから栄養をもらう植物(しょくぶつ)プランクトンや「アマモ」とよばれる海そうがはえたりします。この植物プランクトンを食べて貝が育ち、貝を食べに魚や鳥が集まります。また、海そうの林は魚たちが卵を産み付ける場所にもなります。つまり、干潟は多くの生き物の生命を育む場所なのです。千葉の人々は、こうした干潟の恵みを受けて生活を送ってきました。

← うつっているのは出洲海岸にあった寒川(さむがわ) 神社の鳥居です（稲毛海岸ではありません）。その奥に干潟が広がっているのが見えます。この海に多くの命が生まれて、その命とかかわりながら、人々の暮らしがありました。

(明治末～大正期の写真)

※　どうでしたか？　千葉市の海岸は、大きくすがたを変えてきたのですね。

　今の海岸からは想像もできないような景色のなかで、千葉の人々は「海と深くつながる」ことで生きてきました。しかし、生活をささえてきた干潟は、うめ立てですっかり消えてしまいました。では、現在の私たちにとって、海はどのような存在なのでしょう？　あらためて考えてみることは大切ですね。

◇　取り上げた写真や説明で、いつ頃の、どのようなようすに最も興味をひかれましたか？

◇　もとのすがたからそのように変わったことによって、私たちの生活にはどのような影響（あるいは変化）があったのでしょう？

◇　今の私たちにとって、海はどのような存在なのでしょう？

よいところや、残念なところの両方を見つけてください。そして、自分の言葉でまとめてみましょう。